

インタビュー

『働く喜びが生み出す美しさ』

アート・クリエイティブ事業

代表 徳川 輝尚 氏
とくがわ てるひさ

(京都太陽の園常務理事)



「労働」にはいろいろな目的があり、お金をもうけることも1つです。しかし単にそれだけを目的とするなら、労働の半分の意味ではないのではないのでしょうか？

私は、「労働」はすべての人の権利であり、喜びであり、誇りであると思います。働くことにより「自分にこんなことができた」という喜び、そして「人の役に立てた」という誇りが得られるのです。

以前、重度の障がいのある1人の男の方が、不良コイルの銅線をほどく作業に挑戦しました。

1個ほどけば1円もらえます。その男の方は震える手で1カ月かけてようやく10円を

稼ぎました。「息子に金もうけができるはずはない」と思い込んでいたその男の方の母親が訪れたときも、男の方はその十円玉をしっかりと握り締めていました。それが、息子が生まれて初めて稼いだものだと思つた母親は、感動のあまり泣き出したのです。見た目の結果は小さくても全力を尽くして得た「十円玉の重み」、これが労働の大きな目的だと思います。

障がいのある人が作つたものには大量生産品にはない「深み」があります。それは、一つ一つゆっくりに時間をかけて丁寧に作られるからではないのでしょうか。

彼らは「お金もうけ」だけを目的とせず、「働ける」という純粋な喜びで「つちたま」を作っています。「京のつちたま」の素朴な美しさは、そんな彼らの心から生まれました。ですから、「障がいがあるからこそできる美術」として、私は誇りを持って世の中に広めたいと思っています。「京のつちたま」を1人でも多くの皆さんにお届けしたいと思います。

「京のつちたま」を創作された工藤良健先生とボランティアの皆さん、一生懸命に「つちたま」を丸めている障がい者の方たちに感謝しています。



▲丸く、丸く、丸く…

細長く土をのばして細かく切つてから丸める人、テーパーの上で手で転がして丸める人、指1本で、手のひら全体で。自分にとって最適の方法で、それぞれが作業します。

形のない土の塊から、丁寧に丸められるつちたま。ころころころ。丸く、丸く、丸く…。このつちたまは、誰かを癒やすことができるかもしれない。もしかしたら、誰かを元氣付けることができるかもしれない。このつちたまを手にする人に、優しい気持ちになつてほしい。

手の中で、小さな玉に真つすぐな思いと優しい命が吹き込まれていきます。



- ④ バリ取り
穴あけの時に周りに付く土を取り除いてきれいにします。
- ⑤ 乾燥
- ⑥ 本焼き
上薬は塗らずに、そのまま窯の中で焼きます。
- ⑦ 研磨
表面が滑らかになるようにミルにかけて研磨します。
- ⑧ 乾燥
- ⑨ 金具取り付け
商品ごといろいろな金具を取り付けて仕上げます。
- ⑩ パッケージ